

越冬支援のお礼と 燃料配布報告

サラーム前号で、皆様に越冬募金を呼びかけたところ、多くの方にご協力をいただきました。おかげさまで、レバノンでは当初予定の800世帯に加えて、新たに700世帯以上に暖房用の燃料を届けることが出来ました。ご協力ありがとうございました。以下は、配布を担当し、受け取りに来た人たちにインタビューをした当会の現地職員ウィサルからの報告です。



レバノンにも本格的な冬が到来し、多くの難民たちは過酷な状況下に置かれています。東部のレバノン山脈とアンチレバノン山脈の間にあるベカー地域は、標高1000メートル、冬場は零下になり降雪します。ここに8,500人を超えるパレスチナ人シリア難民（略称 PRS、以下同じ）が、シェルター、テント、倉庫や狭く劣悪な所で暮らしています。テントは材木を渡した上をビニールなどで囲っただけで、広さも4メートル四方しかなく、冬の強い風をしのぐのに十分な強度はなく、雨で崩壊したり浸水したり、時には生命の危機さえあります。

12月に当会では越冬支援として、ベカー地域の1500世帯以上に燃料を配布しました。まずは12月中旬に、パールベック遺跡の近くにあるワーベル・パレスチナ難民キャンプとその周辺の倉庫などに住む700世帯にクーポンを配布し、近くのガソリンスタンドで3日かけて、一世帯あたり灯油65リットルを配布しました。年末には、ベカーの中心にあるパールエリアスという地域に住む800世帯にクーポンを配布し、近くのガソリンスタンドで3日間配布しました。この地域は畑や点在する空き地の中にテントなどを立てて生活している家族が多いので、同時に給油車も回しました。ベカーの PRS 家族は当会の支援を心待ちにしている、口々に御礼を言われました。シリアからの難民が発生した頃はそれなりの支援がありましたが、この冬は UNRWA（国連パレスチナ救済事業機関）の月75ドルの越冬支援しかないからです。

年明け、レバノンは2度の大寒波に襲われ、ベカーは大雪と洪水に見舞われました（左上写真は雪に埋もれたテント村）。残念なことに2人の子どもが凍死するなど、ほとんどすべての難民が被害を受けました。レバノンは産油国でないため灯油の値段は高く、ニーズの高さに支援は追いつきませんが、今後も可能な限りの支援を届けたいと思います。取り残されてしまったこの人たちのことを、日本の皆さん、どうぞ忘れないでください。

燃料を確保し家族を助けるために働く子どもたち

「15歳と16歳の息子2人は、燃料を買うためにパン屋と金属加工場で働いてます」（シリアのヤルムーク難民キャンプから避難してきたカファアさん）。「4人の子どもたちは燃料代を賄うために農場で働き、日に10ドル稼いでくれる。でもシリアの学校では皆成績優秀だったのに、ここでは学校から落ちこぼれてしまった。これからどうなるのか心配だ」（ヤルムークから避難し、一間に7人で生活するアワニさん）。ホムスから避難してきて6年になるムスバさんは「今年はこれまでになく厳しい寒さで、貧しい私たちには寒さ対策ができません」と話します。

アハメドくんは15歳で、学校を退学し午前8時から午後3時までパン屋で働いています。「1日の収入は8000レバノンポンド（約5.5ドル）、そのうち燃料代に5000ポンドをためて、残りの3000レバノンポンド（2ドル）を兄弟姉妹と分けます。燃料支援では全然足りないからです」。将来の夢を聞くと、大きくため息をついて「シリアに戻って奨学金をもらって高校の勉強を続けたい。そして大学へ進学してしっかりとした教育を受けたい」と言いました。



給油を待つ人たち

シリアに帰りたい

レバノン政府はPRSがレバノン国内で働くことを禁じていて、日雇いで農場や建設現場で働くことが黙認されているだけです。そのため大人の男性の多くは働かず、家族を支えることができません。3人の子どもの持つイヤドさんは嘆きます。「働くことが許されてないだけじゃないんだよ。仲間と店を開いたとしても、政府から閉店させられるうえに、4000ドルの罰金を命じられる。私たちはどうやって生きていけばいいのか。どうやって生活することができるのか」。やはり3児の父であるモハンマドさんは「私は工事現場で働いているが、燃料を買うだけの収入はないよ」と付け加えました。

地域の住民代表は、「状況は危機的で、特にUNRWAの支援が減少した今年は深刻だ。君たちの他には誰も私たちに支援する団体はない。家族たちはシリアへ戻ることを強く望んでいるが、多くは家を失い再建する資金もないから、難民キャンプ以外に住める余裕はない。だから、シリアへ帰ることを恐れていたりと、政治的な対立もあるが、もしシリア政府がパレスチナ難民キャンプを再建したなら、全員が間違いなく帰還するだろう」と語っていました。

サラーちゃんのいま

燃料配布の準備のため、昨年10月にベカー地域を訪問しました。首都ベイルートから車で2時間ほど急な山道を走り、峠を越えます。この2年ほど、幹線道路沿いのテントは減っていると感じていましたが、一歩奥に入ると、テント村が続き、テント世帯はかえって増えている気がします。避難生活が長期化する中で、蓄えが底をつき、国連の支援も減っています。家賃を払って間借りすることが難しくなったため、転居を繰り返し、テント暮らしに戻っている家族がたくさんいるのです。

中には、材木もつぎはぎでほんの少ししかなく、屋根や外壁は段ボールを重ねて、その上にビニールシートを被せた程度のテントもありました。薄い銀マットがところどころ貼り付けられているものの、大変こころもとない様子です。訪問したのは10月でしたが、家の中は風が通ってスースーしていました。半年前までは間借りして暮らしていたが、家賃が払えなくなってここに移ってきたという年配の夫婦と娘が住んでいました。妻が癌の手術をしたばかりで手術代はUNRWAが負担したが、薬代と入院費を払わないとならないからということでした。

サラーム109号で紹介したサラーちゃんにも再会しました。両親をなくし姉弟で、シリアからおじさん家族と逃げてきた女の子です。彼女は目の前で



サラーちゃん(右)とおばさん、いとこ



テント村(10月)



テント村(遠景10月)

父と母が殺されるのを目撃し、大きなトラウマを抱えていました。最初に会った2016年には、家族以外とは目もあわず、話もしませんでした。

サラーちゃんと弟のレイスくんはPRSのため、午前授業があるUNRWAの学校に朝6時に家を出て、1.5～2時間かけて通っています。サラーちゃんは私たちの質問にも答えられるようになっていました。「アラビア語の授業が好き。学校の先生は優しいし、友だちもいるわ。学校は楽しいし、絵を描くことが大好きで、学校でも図工の時間があるよ」と。絵を使った心理サポートも受けているということでした。サラーちゃんとレイスくん、そして叔父さんの子どもたちが、この2年でしっかりと成長していたのは、本当に嬉しいことでした。

一人も取り残さない

叔父さんはシリア人のため、子どもたち(サラーちゃんのとこ)は、バスでレバノンの公立学校に通っています。午後のシフトのため、午後1時に家を出て、帰りが夜8時過ぎになることもあるそうです。家族が住んでいるテント村は20くらいのテントが立っていますが、街灯などは無く夜は真っ暗です。朝6時に出かけるサラーちゃんたちと、夜8時に帰ってくる自分の子どもたち、その世話をする叔母さんの苦労も感じました。

統計上の数だけを見ると、レバノンにいるシリアからの難民の数は確かに減り、人数だけが指標となる国際社会からの支援も減ってしまうのです。しかし、今なお残っている人々は、何かしらの事情でどうしても帰還が難しい人々、より脆弱な人々です。「一人も取り残さない」という国連のミレニアム開発目標にもあるように、できる限り、子どもたち1人1人に寄り添った支援を続けていきたいと改めて思いました。